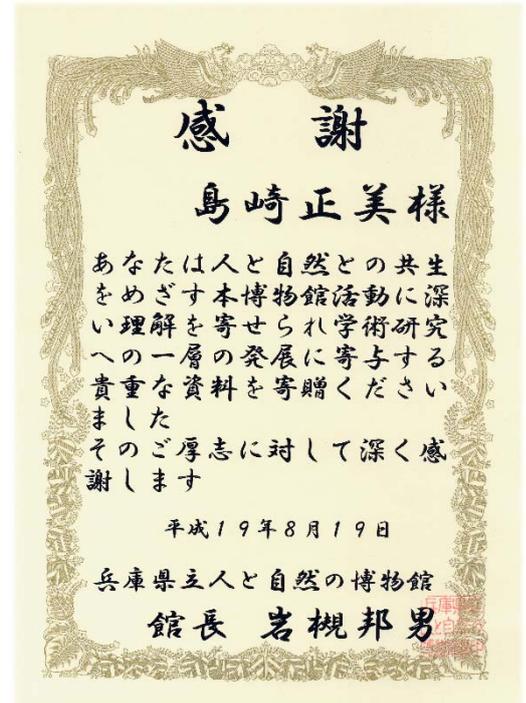


ヒメヒカゲはつい最近日本絶滅危惧Ⅱ類からⅠB類への選定変えとなった、このまま放置しておいたら絶滅してしまうおそれのあるチョウ。実際、少なくとも1982年に兵庫県砥峰高原の湿原まわりにみられたヒメヒカゲは、同様にこの高原に生息していたウスイロヒョウモンモドキというタテハチョウ科のなかまともども、今では絶滅してしまっている。秋の砥峰高原に広がるススキが原を観光の目玉とするために徹底した野焼きが繰り返し実施されたことが絶滅の原因だと考えられる。限られた自然環境のなかで生きているチョウたちにとって自然環境の急激な変化が致命的となった実例だ。まさか絶滅してしまうとは考えもしなかったことで、1982年に採集して保管していたヒメヒカゲの標本はまさに貴重な生息記録となったため、ウスイロヒョウモンモドキの標本とあわせて三田市の「兵庫県立人と自然の博物館」に寄贈したが、博物館からは丁重な感謝状をいただいた。



ゴルフ場開発や宅地造成など、日本全国で草原性自然環境が激減しており、砥峰高原のような状況があちこちで起きているが、幸いなことに加古川には安定して発生を継続している地域がいくらか残っている。それでも2008年に加古川の里山・ギフチョウ・ネットと加古川市環境政策課とがタイアップし、有志ボランティアの協力も得て実施した精力的な生息域調査では、数年前には相当数の発生が認められたはずの場所でほとんど発生が確認できないなど、憂慮すべき状況が進展していることがあきらかになった。

2008年12月、筆者は残念ながら足をケガして参加できなかったが、ギフチョウ発生地区で行ったと同じような生息地の環境整備活動として、草原維持に悪影響となるヤマモモの木の枝うち作業などが実施され、2009年以降、その効果確認の再調査が計画されている。

ヒメヒカゲは幼虫で越冬してスゲ類の葉っぱを食べて育ち、5月下旬から7月上旬まで活動する。翅表は地味な黒で、写真に示すように雌雄共に裏面がとてもきれいで、その眼状模様の数や形態に



変化もみられ、そうした変化を好む採集者の格好のターゲットとなっている。加古川では岩山の斜面に広がる草原地帯に生息し、きわめてゆるやかな飛翔で飛び遊ぶため、その気になれば簡単にネットで捕獲されてしまう。保全をめざすメンバーは無節操な採集者に現在の危機的状況を理解してもらうために警告看板をたてたりしなくてはならないのが実になさげなく思う。

なお、♂が交尾をしかける際にこれを拒む♀は草陰にもぐりこんでしまう習性があり、上記生息調査の過程で雌雄がからみあう場面を目撃している。ビデオカメラで追っていると、草原の陰となる隙間に確かに♀がストーンと落ち込む様子がみえたあと、♂もその草影へと同じようにもぐりこんでいって見えなくなり、それ以上は追跡記録ができなく、もしかしたら草陰で交尾が成立したのかも知れない。写真では分かりづらいが、ビデオ映像ではからみの過程が比較的よく記録できている。



チョウは蛹となれば羽化するまで全く動けなくなるため、天敵などに見つからないようにとても巧妙な蛹化場所を選ぶため、野外でチョウの蛹を見つけるのはきわめて難しいが、筆者は偶然に本種の蛹を発見でき、その蛹化環境があるていど推測できるようになって結局、2009年に2個体、2010年1個体を発見。2012年の発見時には野外での自然羽化の記録もとれ、「やどりが」に発表した (No.237, p.33-40, 2013)。さらに2017年にも蛹を見つけることができ、野外での自然羽化の記録を「月刊むし」に発表した (No.559, p.40-42, 2017)。

June 3, 2012 ヒメヒカゲ自然羽化記録

昨日テニスで汗をかいたあと、何かが起こりそうな予感があったというのか遅い時間帯のフィールドに出る。そしてそこに幸運の女神が微笑む。はっきり羽化の兆候を示すヒメヒカゲの蛹が見つかったのだ。本日の羽化本番の記録を達成するまではと、昨日のうちに「蛹再発見！」とアップしたいのをぐっところえたのだが、そのわけは、これまで2度もあと一息というところで自然羽化のビデオ記録に失敗しているためだ。今回こそはとの思いで、早朝5時からフィールドで待機。胸・腹の境界部分が幅広くなってきたら羽化が近いという2010年の経験を生かして、不思議なほど余裕をもってビデオ撮影準備を整える。7時40分過ぎに蛹がぴくりと動き、やがて胸部が割れて羽化が始まる。まさに三度目の正直で胸が高鳴る。ところが、飼育個体の羽化とはまるで勝手がち



がって戸惑う。カメラアングルの自由度が利かないのだ。チョウが裏側へと回ってもカメラはそちらに入れない。さらには三脚固定のカメラでフォローしづらい場所へと移動しはじめるのには参るが、かろうじて遠くはないケネザサ葉裏に落ちてくれて、最後はじっくりときれいな♀の後翅をアップで記録する余裕さえでてくる。この日は、フィールドに長くはいられず、元気でたくさんの子孫を残してくれよと願いながら引き上げる。

May 31, 2017 ヒメヒカゲの蛹を発見

例年、卵や幼虫を観察できる湿地帯まわりでそれとなくヒメヒカゲの蛹を探してみる。2012年に蛹からの自然羽化記録を撮って以降はまったく蛹は発見できていなく、今回も徹底的に探そうという気構えがあるわけで



株を上からのぞいて歩くだけなのだが、枯草となったコイヌノハナヒゲが多い株をそっとのぞいたそのとき、まぎれもない緑色のヒメヒカゲの蛹が見つかる。あらためて実際に目に飛び込んできた状態を記録すると、蛹がどんなものであるのか知らなければ見過ごしてしまうほどの小ささで下垂しており、蛹にフォーカスして少し拡大すれば、ようやく下垂蛹を認識できる。

はない。さっさと食草のある

June 3, 2017 ヒメヒカゲ：野外での羽化の瞬間を撮影記録

5月31日発見のヒメヒカゲの蛹が6月2日に羽化の兆候を示し、本日の羽化を推定して、昨日とは逆に加古川河川敷ルートで北上サイクリング。到着した現地の草原にはカメラマン3名の姿が見えるが、蛹のことを話すと撮影に集中できないおそれがあるので、声かけをせずに単独行動をとる。10時過ぎの蛹は腹節部がいくらか伸びていて、午前中に羽化するのが間違いないと思われ、すぐにビデオ撮影 ON として様子を見る。蛹の微妙な色調変化を知りたいのだが、いくらか陰のある部分の下垂蛹の変化を太陽光のハレーションが避けられないビデオの小さなファインダー越しに識別するの



は容易ではなく、羽化の瞬間をしっかりと記録するためにフォーカス合わせを再確認してビデオ撮影 ON を継続。ウグイスの谷渡りやカラスの鳴き声も撮り込まれる自然のもと、やがてヒメヒカゲの羽化が始まる。現地到着時の蛹の記録を確認すると、その場では知ることができなかった翅部分ですでにじゅうぶん褐色を帯びていたことがわかる。ちなみにビデオ撮影をセットした様子も別カメラ

で記録しておいた。撮影中の蛹の近くで似たような環境を調べてみると、なんとヒメヒカゲの羽化脱皮殻がわずか 1m も離れていない場所に見つかったりする。近くで見つけた蛹の羽化脱皮殻は、もろい枯草茎への下垂蛹で、撮影しやすいように周りをいじるのは禁物だ。自然羽化の撮影記録を終えようとするタイミングで、ヒメヒカゲの撮影目的で草原にいた三木市からという O 氏と F 氏がやってくる。ヒメヒカゲが今羽化したところだと教えてあげると、自然状態での羽化シーンの撮影にいろいろ工夫される。羽化後の翅の開閉動作がみられる段階で、筆者も再度の撮影記録をとり、しばし談笑をかわして別れる。